

2009年11月21日(土)～23日(祝・月)に、東京大学数理科学研究科棟の大講義室において第7回「高木レクチャー」が行われました。参加者は200人を超える大盛況となりました。

2006年に始まった高木レクチャーは、本学理学部数学教室の教授であった高木貞治先生のお名前を冠した定期講演会です。通常は2日間の日程で数学のさまざまな分野から講演者を招待していますが、第7回の高木レクチャーでは、高木貞治50年祭記念事業と連動して、勤労感謝の日を含む3連休をフルに使い、高木先生のご専門であった整数論の分野から3名とそれ以外の分野から2名を招き、それぞれ2回ずつの講演をしていただきました。今回の高木レクチャーは、東大数理GCOEのプロジェクトの一翼を担い、日本数学会と東京大学大学院数理科学研究科との共催で行われました。

第7回の高木レクチャーの講演者は、パリ第7大学のハリス教授、ハーバード大学のホプキンス教授、レーゲンスブルク大学のヤンセン教授、カルフォルニア大学ロスアンゼルス校のカーレ教授、マサチューセッツ工科大学のマッカーナン教授の5名でした。講演当日の受付では、各講演者から予め集めたレジュメを印刷して綴じた約160ページのブックレットが配布されました。



第7回高木レクチャー：左からハリス、マッカーナン、高木貞治(銅像)、ヤンセン、カーレ、ホプキンス



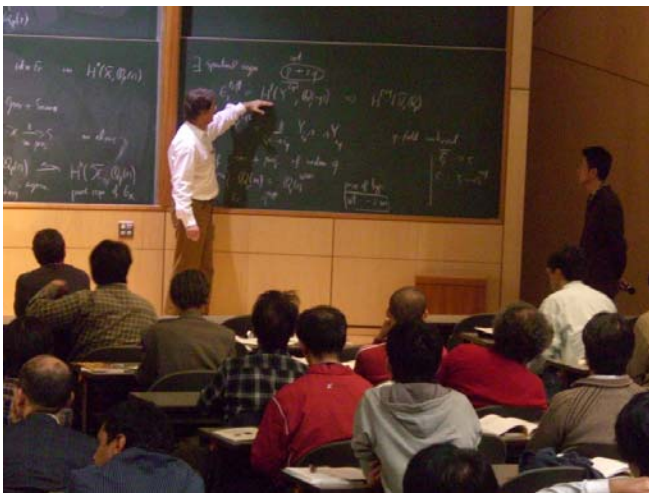
コーヒー・ブレイク

各招待講演者の講演タイトルは次の通りです。

ハリス教授	「ラングランズ・プログラムの数論的応用」
ホプキンス教授	「ケルヴェア不変量問題」
ヤンセン教授	「数論幾何における重さの概念」
カーレ教授	「セール予想とその帰結」
マッカーナン教授	「森ドリーム空間」

錦秋の3連休、会場となった東大数理棟の大講義室では、講演者・参加者の方々の情熱と、「良いもの」を共有しようという思い、そして「高木レクチャー」の目指す「新しい数学の発展」を求める熱気の中、講演中も休憩時間も終始議論が交わされました。大講義室の隣のセミナー室では、日本数学会による「高木貞治先生と日本の数学の教育研究」の展示が日本数学会理事である真島秀行教授のプロデュースで行われました。全講演が終了した11月23日(勤労感謝の日)の夕方には、2階のコモン・ルームでワイン・パーティが開かれました。リラックスした雰囲気の中で新しい数学の創造があちこちで始まっていたのではないのでしょうか。

この高木レクチャーの準備と当日の運営にあたっては、整数論の斎藤毅教授を中心に、河東泰之教授、小野薫教授、中島啓教授、私の5名の組織委員に加えて、日本数学会理事長でもある坪井俊教授、さらに東大数理の中川



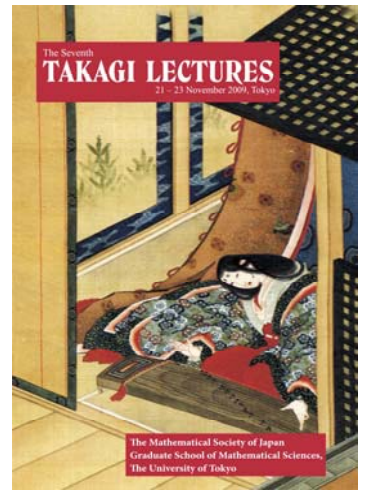
ヤンセン教授と座長の齋藤秀司教授



ホプキンス教授と座長の森田茂之教授



ワイン・パーティー



第7回高木レクチャーのブックレット

紀さん・吉村明日香さん・久光とも子さん・松本明子さん・三上福子さん・吹野美絵さん・小林菜穂子さん等が協力してくださいました。また、日本数学会からは理事の満淵俊樹教授、事務局の長谷川暁子さんも来てくださって、その活動が支えられました。講演の様子は麻生和彦助教・東正明さんらによる東大数理ビデオアーカイブス・プロジェクトチームと戸瀬信之教授（日本数学会情報システム運用委員会）、丸山文綱さんの協力により撮影・記録され、ウェブ http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_video/ でまもなく公開される予定です。

高木レクチャーのホームページ http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_jp/

【高木レクチャー】「日本の現代数学の父」と呼ばれる高木貞治の名にちなみ、2006年11月に始まった。数学者の名前を冠した定期招待講演会は、日本初の試みである。新たな数学の創造に寄与することを目的に、現代数学の最高峰の講演者を招いて年2回、春と秋に行われる。講演は、その分野の専門家に対してではなく、数学の広い分野の学生・研究者を対象に行われる。

【高木貞治】1875-1960。数学者。東京帝国大学卒業後、23歳でドイツに留学。ゲッティンゲンで世界の俊秀たちに出会い、大きな刺激をうける。帰国後26歳で東大助教授となり、4年後に東大教授就任。代数的整数論の研究で『高木類体論』（1920）を発表、ヒルベルトらの類体の概念を一般化した。「数学のノーベル賞」といわれるフィールズ賞の第1回選考委員（1936年）として世界5人の中の1人に選ばれている。2009年秋から2010年にかけて、日本数学会による高木貞治50年祭記念事業の行事が行われる。